

アメリカ革命と「自由の娘たち」

肥後本 芳 男

- I はじめに — 問題の所在
- II 対英抵抗運動と女性
- III 「自由の娘たち」と政治意識の高揚
- IV 革命期の公共圏の形成とジェンダー
- V 終わりに

“I long to hear that you have declared an independency — and by the way in the new Code of Laws which I suppose it will be necessary for you to make I desire you would Remember the Ladies, and be more generous and favourable to them than your ancestors. Do not put such unlimited power into the hands of the Husbands. Remember all Men would be tyrants if they could. If perticuliar care and attention is not paid to the Ladies we are determined to foment a Rebellion, and will not hold ourselves bound by any Laws in which we have no voice, or Representation.”
(Abigail Adams to John Adams, March 31 1776)

I はじめに — 問題の所在

アメリカ植民地がイギリス本国から独立の決意を固めつつあった1776年の春、アビゲイル・アダムズは革命の指導者である夫ジョンへ宛てて一通の手紙を書き送っている。この書簡の中で、アビゲイルは新国家の創設に際して

婦人の存在を忘れないようにと夫に懇願したばかりか、新共和国において女性たちの声が反映されず十分な配慮が払われないのならば、反乱を起こすことになりましょうと警告した¹¹⁾。この手紙はすでにアメリカ史研究者の間ではあまりにも有名な史料の一つである。だが、アビゲイルの警告が女性の参政権を明確に指しているのか、あるいはそれが男女の平等な諸権利の要求を意図しているのか、研究者の間でもまだ解釈の合意に至っていない。

近年アメリカ革命史研究において特筆すべきことは、70年代からの目覚しい社会史の隆盛と符合して、優秀な女性の歴史家によって女性史からのアプローチが盛んに試みられるようになったことである。従来のアメリカ革命史研究は、対英抵抗運動から合衆国憲法体制の成立に至るまでの政治史中心的な考察が主流を占め、いわゆる主要な愛国派たちの言動と印紙法導入以降しだいに急進化する各植民地情勢の分析が中心であった。ところが、ベトナム反戦運動と連動した学生運動や女性解放運動の影響を受けて、有能な若手の女性研究者が大挙して大学院に進学し、研究職のポストを得るようになると初期アメリカ史を女性史の観点から捉えなおそうとする動きが活発になってきた。

初期アメリカ史における女性の社会・経済的役割をめぐる解釈は、近年女性史の研究対象の広がりとはアプローチの深化に伴ってより複雑な評価が提示されてきている。すなわち、植民地時代にはコミュニティや家族内でアメリカ女性は比較的高い役割を担っていたとする、従来のいわゆる「黄金期」説は再検討された。それに代わって、アメリカ女性の社会・家族的な役割は17世紀末には早くも低下し、18世紀を通して婦人の法的、社会的な独立性はしだいに失われていったとみる解釈が強調され始めた。さらに、1980年以降研究対象は、ニューイングランドを中心にした上・中流階層の白人婦人から、貧困な下層女性や南部プランテーションの白人婦人たちに広げられた。また折からの人種・民族研究の流行に触発されて、今や女性史研究は黒人奴隷やエスニック集団を含めた、より複合的な人種・ジェンダー関係の史的分析へと発展したのである¹²⁾。

このような女性史研究の進展は、アメリカ革命の評価、つまりアメリカ革命の革命性に関する議論を必然的に呼び起こした。18世紀以降のアメリカ女性の社会・経済的地位の継続的な低下を強調する、ニューレフト史家の多くにとって、白人男性の「建国の父たち」に率いられたアメリカ革命は単に「変化の幻想」を生んだに過ぎなかったとみなされた^③。それどころか、革命以後「共和国の母」の保守的な概念に組み込まれて、アメリカ婦人は家庭という私的な領域の中に追いやられて、夫と子供に対する献身を余儀なくされたと解された^④。さらに、19世紀初めには婦人の伝統的な寡婦産権さえも略奪されていった事実を突きつけて、ラディカルな若き歴史家たちはアメリカ革命の革命性自体に正面から疑問を投げかけたのである。他方、メアリー・ベス・ノートンは、社会史的な観点から広範囲な一次史料の発掘とその膨大な史料分析を通して、アメリカ革命の到来と女性たちの生活の変化に見られる相互関係を実証的に探ろうとした。彼女によれば、アメリカ革命は単に政治・軍事的な事件ではなく、男女を問わずすべてのコミュニティ住民を巻き込んで社会文化全体にかかわるまさに革命的な分岐点だったと解釈された^⑤。また、当時共通の問題関心を抱いていた歴史家リンダ・カーバーは、思想史のアプローチから同様の課題に取り組んだ。カーバーは、アメリカ革命が婦人たちに及ぼした影響の思想史的な意義を強調する一方で、革命思想の主流を占めた共和主義から派生し、革命体験の中で新たに創造された「共和国の母」の概念に象徴されるアンビヴァレントなアメリカ革命の特質を鋭く指摘した^⑥。

上述したように、最近の初期アメリカ女性史研究では、民衆史や地方史からの精緻な個別研究が精力的に行われている反面、アメリカ革命のように世界史的に大きな事件を婦人たちはどのように受け止めたのか、また18世紀末の大西洋を挟んだ二つの大きな政治革命が女性たちの生活と思想にいかなる影響を及ぼしたのか、という重要な点に関してまだ十分な説明が進んでいるとは言い難い。ジェンダー関係史の中でアメリカ革命を捉えなおす作業は、より複眼的で洞察に富む革命史理解をもたらす可能性を秘めていると思われる。

る。本稿では主に1760年代末から1770年代前半にかけての対英抵抗運動期に焦点を当て、この時期しだいに顕著になった婦人たちの革命への参加行動のプロセスと女性たちの政治的・ジェンダー的意識の高揚を分析したい。なお、本論は考察の対象をもっぱらボストンからチャールストンにかけての東部沿岸都市の白人女性に限定せざるを得なかったが、それは現在著者が入手し得る一次史料や本稿の視角の制約によるものである。

II 対英抵抗運動と女性

長期にわたったフレンチ・アンド・インディアン戦争の後、イギリス政府は財政の再建と北米イギリス領の防衛費の捻出を図って、一連の新たな歳入法をアメリカ植民地に導入した。その突然の植民地政策の転換にアメリカ植民地人は当初当惑し、しだいに対英抵抗運動を激化させたことは周知の事実であるが、この抵抗運動における植民地の婦人たちの役割は、アメリカ革命史研究において従来あまり議論の対象にされなかった⁷⁾。恐らく、これは革命運動が男性指導者と愛国派民衆によってもっぱら推し進められ、女性が当時公的な場で発言し行動することは慣例的に認められていなかったことにも関係があろう。加えて、18世紀末までは植民地女性の活動を記録した史料は非常に乏しく、女性史家は散発的な新聞記事や現存する書簡、日記の断片に基づいて、アメリカ植民地の婦人たちの過去の言動を復元するしか手立てがないのである。こうした史料的な困難にもかかわらず、彼女たちが対英抵抗運動に実際どのようにかわり、その運動が女性の意識の形成にいかなる影響を及ぼしたのかを今一度検証してみることは、アメリカ革命の多面的な解釈とその後のアメリカ史のより深い理解につながるはずである。

1765年の印紙法の導入によって、アメリカ植民地全土に大きな課税反対運動が巻き起こり、その動きは印紙法会議の召集によって対英抵抗運動へと発展し組織化されてゆく。メリーランドの法律家ダニエル・デュラニーは、1765年10月に本国議会の植民地への課税権の正当性に疑問を投げかける有名なパンフレットを刊行し、以後植民地全土で歳入法の是非をめぐる憲法議論

が沸騰した。エドモンド・モルガンが古典的な研究書で指摘しているように、その憲法論争はアメリカ植民地のイギリス本国への「隷属化の計画」と結び付けられて植民地側の不安をいっそう煽る結果になった⁹⁸。しかし、多くの植民地人たちを急速に対英抵抗運動に駆り立てたのは、この抽象的な憲法問題だけではなかった。憲法論議に実質的な根拠を与えたのは、7年戦争以後に顕著になってきたイギリス製品のアメリカ植民地への大量流入の実態であり、イギリスやスコットランド商人に対する年々増大するアメリカ商人の負債と密輸の取り締まり強化策による貿易規制が背景にあった⁹⁹。

実際1760年代のアメリカ植民地におけるイギリス製品の輸入額の増加は、目覚ましいものだった。1750年から1772年の間にイギリス製品の輸入額は120パーセントの著しい伸びを示していたし、1768年から1772年にかけてアメリカ植民地全体の商品輸入額は年平均392万ポンドに増加し、この内公式の対英負債額は実に年額105万ポンドに達していた¹⁰⁰。このようなイギリス製品の大量の輸入が、18世紀半ばの植民地社会の急速な「イギリス化」に貢献したことは間違いない。裏を返せば、アメリカ植民地における贅沢品の「消費熱」は、植民地の社会・経済的な成熟を示すものだった¹⁰¹。歴史家リチャード・ブッシュマンの研究によれば、革命期までにアメリカ植民地は、ロンドンの文化的領域の周辺に位置づけられ、上流階層に限らずより多くの中流層の植民地人が社会的上昇と洗練された生活を志向し始めたという¹⁰²。彼らは家屋を改築し新たに応接間を設けて、上質なイギリス製品や嗜好品をこぞって求めるようになった。つまり、アメリカ植民地におけるイギリス製品の需要の高まりは、イギリス帝国の貿易・情報網の拡大を通して本国の商業や政治文化に植民地がより密接に組み込まれる過程で、新たに喚起された植民地人のより洗練された生活志向を反映したものであった¹⁰³。しかしながら、7年戦争後の本国の植民地政策の急激な転換を契機に、アメリカ商人や植民地人たちは、一連の新たな歳入法の導入に憤慨するとともに、おびただしい量のイギリス商品が植民地社会に溢れるのを目の当たりにして困惑したのである。

1765年の印紙法の導入をめぐって植民地の港湾都市部で大きく盛り上がつ

た対英抵抗運動の中で、植民地の論客は当初イギリス臣民としての基本的権利の擁護を掲げて、ジョン・ロックの自然権哲学を武器に論戦を展開するが、抵抗運動そのものは折からの共和主義思想の隆盛と結びついて、しだいに道徳的な意味合いを帯びていった。ニューイングランドでは、本国の貿易規制の強化を嫌う密輸商人や不当な増税に警戒の念を強めた自営農民が、イギリスの急激な植民地政策転換の中にアメリカ植民地から自治と自由を奪って政治的、経済的に植民地人を隷属状態に貶めようとする意図を見出した⁸⁸。

他方、ヴァージニアのプランターたちは、この時期までにロンドンやスコットランド商人に対して多額の負債に苦しむようになっていた。領主としての優雅な生活様式を維持するために、プランターたちはシャツ、ガラス、ペンキ、靴などの日用品から陶磁器、毛織物製品、マホガニー製のテーブルや家具などの贅沢品、砂糖や葉巻、茶などの嗜好品まで、大量のイギリス製品を毎年購入していたが、それを可能にしたのが当時新たに導入されたクレジット・システムだった⁸⁹。とりわけ、1750年以降のプランターたちの負債の伸びは著しく、革命直前にはチェサピーク湾岸の植民地人はイギリスの年間総輸入額の2.5倍以上の負債を抱えていたと推計される⁹⁰。プランターたちの「消費熱」は、当時ヨーロッパ市場における不安定なタバコ市場の暴落とも相まって、イギリス商人への彼らの負債額を急激に増大させたのである。彼らにとって負債は単なる財政的な問題にとどまらず、ロンドンやスコットランド商人に経済的に従属させられることを意味し、結果的に自らの自由と独立を脅かされるように思われた。このような状況下で、「自由独立、平等、美德」を標榜する共和主義思想に強く魅せられていたプランターたちが、7年戦争後のイギリス本国の政策転換と自らの社会・経済的苦境を重ね合わせて解釈するようになったのも無理からぬことであった⁹¹。

1760年代半ば以降、印紙法やタウンゼンド諸法に異議申し立てをする植民地の抵抗運動は、ニューヨーク、フィラデルフィア、ボストンなどの主要な植民地商人の多くを巻き込んで各地でイギリス製品不輸入協定の結成をもたらした⁹²。イギリス製品不輸入協定や不買運動が盛り上がるにつれて、植民

地指導者たちは、イギリス本国が意図的にアメリカ植民地を政治的、経済的に完全に依存・従属状態に貶めようとしているのではないか、という疑念を深めていった。そしてこのような現実認識は、依存と放蕩を何よりも忌避する古典的な共和主義言説に実体を与えて、愛国派指導者たちがアメリカ植民地と本国政府の間の急速に悪化しつつあった当時の政治関係を理解する上で、主要な思考的枠組みを提供したのである。しかし広範囲の持続的な対英抵抗運動は、より広い民衆の支持と協力がなければ到底維持できなかった。つまり、愛国派指導者や商人層の団結のみならず、イギリス製品不輸入協定の成功は、一般民衆によるイギリス製品の不買運動への理解と協力にかかっていたのである。植民地女性たちが公的な政治の舞台に初めて登場してくるのもこのような革命初期の騒乱期であり、とりわけイギリス製品の不買運動において重要な役割を期待されることになったのがアメリカ婦人たちであった。

イギリス製品不買運動は、アメリカ植民地の指導者たちにとって対英抵抗運動の中心的な戦略であると同時に、植民地の婦人たちには初めて政治的、公的な役割を担う機会となり、結果的にアメリカ女性の政治意識とジェンダー意識を刺激した。イギリス製品不買運動の重要性は、対英抵抗運動指導者たちによって再三再四民衆に呼びかけられたが、家事を担う婦人たちの理解と協力がなければ不買運動は維持できなかった。1767年のタウンゼンド諸法の導入を契機に、植民地の上・中流階層の女性たちは各地で婦人同盟を形成してその要請に応えた。まず、ヴァージニア婦人同盟が1769年に結成され、ニューヨークの婦人たちがそれに続いた⁹⁸。ボストンでは1770年に536名の婦人たちが署名して婦人不買同盟が結成された⁹⁹。ボストン茶会事件の発生とその報復措置であるイギリス本国によるボストン港の閉鎖などの一連の事件に続いて革命運動のいっそうの急進化につれて、南部植民地の各地でも婦人同盟が生まれ、アメリカ植民地全土の多くの女性たちが革命の渦の中に主体的に身を投じた。とりわけ有名な事例は、1774年10月に発足したノース・カロライナの婦人不買同盟である。それは、イギリスの風刺画に「ノース・カロライナ、エディントンの愛国婦人会」として紹介されてヨーロッパ各地で大きな

反響を呼んだ⁹¹。ティーポットからお茶を投げ捨てている幾人かの婦人たちと男性の誘惑を振り切ってイギリス商品のボイコットの宣誓書に署名しようとしている、風刺画の中のアメリカ女性の勇ましい姿は、アメリカ革命のこれまで十分に語られなかった婦人たちの政治意識の高揚の一端を見事に捉えている。

他方、この時期には対英抵抗運動の一環として印紙徴収官への脅迫やイギリス商品を売買する商店への群集行動が盛んになってくるが、群集の中に女性たちも混じっていたことが伝えられている。歴史家アルフレッド・ヤングは、18世紀の群衆行動を次の3つの類型に大別する。第一のタイプは、地域のリーダーに率いられ、ある程度明確な政治的目的を持つ秩序だった群衆行動であり、第二のタイプは、下層民衆を中心に自然発生的に生じる群衆行動である。後者のタイプは、伝統的な掟を破った者やコミュニティ全体の利益や調和を損ねた者などを標的にして行われた私刑であり、通常罰則者は体中にタールを塗られた上に鳥の羽毛をつけられて、公共の場で晒し者にされた。第三のタイプは、革命期に頻発したものであるが、ボストン虐殺事件にみられるような過激で暴力化した群衆行動である。女性たちの群衆行動の参加はもっぱら第二のタイプの中で観察されることから、伝統的な群衆行動のパターンを踏襲していたと考えられる⁹²。当時1万5千人の人口を誇っていた港湾都市ボストンに、1768年以降4千人にも上るイギリス兵が大挙して駐留する事態に発展すると、ニューイングランドの婦人たちも革命の気運を容易に察知することができた。地元の新聞も下級イギリス兵によるアメリカ女性へのレイプ事件や彼らの粗暴で侮辱的な行動をしばしば報じ、反英的な気運を煽った⁹³。このような現実や報道に直面して、アメリカ女性の多くは植民地と本国間の論争へ無関心ではいられなくなったのである。

Ⅲ 「自由の娘たち」と政治意識の高揚

イギリス製品不輸入・不買運動の展開の裏では、アメリカ植民地の地元産業の育成とアメリカ製品の購買が新聞紙上で声高に叫ばれた。対英抵抗運動

の急進化とともに植民地の製造業の促進が改めて政治的な重要課題として強調されるようになった。1760年代になると女性たちの裁縫グループの会合がしばしばもたれ、新聞紙上で注目すべき愛国的な活動として取り上げられた。裁縫グループの会合自体は、18世紀アメリカ植民地では女性たちの新しい活動形態を意味するものではないが、裁縫グループの会合がこの時期各地でかなり頻繁に持たれるようになり、婦人たちの紡績活動が愛国的な行為としての意味合いを新たに付与されて、活字メディアで賞賛された事実を看過してはならない。

社会史家ローレル・ウルリッチの詳細なケース・スタディは、ニューイングランドの女性たちの裁縫・紡績グループの会合が、印紙法論争以降とりわけ頻繁にもたれるようになり、地元の新聞にしばしば特筆すべき活動として紹介されたことを実証的に示している⁹⁰。彼女のデータによれば、1766年にプロヴィデンスで18名の女性たちの会合が持たれたのを皮切りに、1770年までにニューイングランドの主要な新聞記事に取り上げられた裁縫グループの会合は47に上った。とりわけ、68年に9回、69年に30回、70年に7回の会合が持たれたという統計は、タウンゼンド諸法導入後にイギリス製品不買運動とアメリカ製品購入運動がいっそう盛り上がっていった時期と連動しており大変興味深い⁹¹。

それでは、女性たちの裁縫グループの活動と革命運動の間にどのような関係があったのだろうか。裁縫サークルの実態に関する具体的な史料は、当時の新聞記事や女性たちの書き残した日記に限られており、残念ながら散在する史料の断片を通してしか窺い知ることができない。裁縫グループでは、通常女性たちが原材料と裁縫道具を各々自宅から持ち寄って、リンネル、綿、麻や毛織物の布を競って紡ぎ、時にはそれらを材料にして敷布やキルト、靴下などを作って、布糸や産物を牧師の一家やコミュニティに寄付したという。ここで重要なのは、1769年9月から10月にかけて見られたようにマサチューセッツのブリッジウォーターの会合では97名、ブレントリーの会合では136名にも上る大勢の若い女性たちが教会近くの牧師の家に集合し、糸を紡いだ

り礼拝をしたりして交流していることである⁹⁹。ウルリッチは70%以上の裁縫サークルの会合が会衆派牧師の家で行われていた事実を重視して、裁縫グループの活動を政治的活動あるいは革命運動の一環として捉えるよりは、むしろ教会を中心とした伝統的な慈善活動の継続として考えたほうがよいのではないかと結論付けている。

確かに彼女の指摘するように、このような裁縫グループの活動と政治的急進性を単純に結び付けて解釈することは慎むべきであろうが、自家製の敷布を生産することでイギリス製品不買運動を側面から補うとともに、裁縫グループの会合は多くの婦人たちにとって家庭から離れた貴重な社交の場となり、当時の緊迫した社会状況の認識を高める格好の機会を提供していたと考えられる。裁縫サークルでは、早朝から日没まで長時間に及んだ糸紡ぎの合間に「アメリカ産の茶菓子」が振舞われ、婦人たちの間では様々な情報が交換された。通常一日の締めくくりには教会まで行進して礼拝が行われ、愛国的な詩歌が若い女性たちによって合唱された。例えば、次のようにブリッジウォーターの会合で詠まれた歌詞は、美德に満ちた女性の賢明さを讃える一方で、外国製品の排除、隷属状況からの解放の要求がこめられており、博愛的な宗教的要素と共和主義的で政治的な言説の融合したメッセージを容易に見出すことができる。

「ルビーよ、汝の輝く、汝のオリエントの真珠よ！

男たちはどれほど欲するでしょうか。

しかし美德溢れる女性の価値はその貴重な宝石よりも勝っているのです。

彼女の心はいかに親切で、どんなに寛容なのでしょう！

彼女はなんと勤勉な働き手なのでしょう！

沈みゆく祖国を救うために、いかに質素な家計なのでしょう！

彼女は外国製品を最も高貴な気持ちで拒否し、

国内製品をつましく求めます。

彼女は労働し、手助けし、また無償で奉仕します、

牧師、貧困者、あらゆる人々が必ずや彼女を友人として認めるでしょう。彼女は自分自身と家族、貧困な者すべてに衣類を提供します。皆々がこのように美德に満ちているのならば、祖国は隷属状況からすぐに救い出されることでしょう。』⁷⁰

このような事例から推察されることは、婦人たちの裁縫グループの活動が、単に伝統的な糸紡ぎ競争や宗教的な慣例の行事にとどまらず、植民地と本国政府の間の緊張が高まる1760年代末には女性たちがアメリカ植民地を取り巻く政治的状況と対英抵抗運動の重要性を学び、互いに交流する格好の場に変容しつつあったのではないかと、いうことである。事実アメリカ植民地が革命に突入し、本国と戦火を交えるようになると、婦人たちの教会を中心とする裁縫グループの活動はいっそう世俗化し、大陸軍兵士たちのシャツや靴下などの不足を補うための重要な後方支援の役割を担うことになるのである⁷¹。

1760年代後半にしだいに急進化した愛国派グループは自らを「自由の息子たち」と称し、アメリカ植民地の対英抵抗運動の下部組織を構成して革命の推進に重要な役割を果たしたことはよく知られている。彼らの活動に触発されて、イギリス製品不買運動の最中「自由の娘たち」と名乗る女性のグループが現れ始めた。残念ながら、裁縫グループの場合と同様に「自由の娘たち」の組織や実際の活動記録を具体的に示す現存の史料は乏しいのであるが、新聞や日記、書簡などの入手可能な史料から推察すれば、「自由の息子たち」と違って対英抵抗運動のための明確な政治的下部組織というよりも、先述したような裁縫グループや教会コミュニティを中心とした対英抵抗運動を支持する愛国的な婦人たちの緩やかな連帯組織と考えたほうがよいだろう。1769年の『ボストン・イブニングポスト』紙で報じられた28の裁縫グループの会合のうち、実際に「自由の娘たち」の集会と称したのは5つのグループだけであったが、このサンプルは過小に評価されるべきではない、「自由の娘たち」という呼称をあえて意識的に用いていること自体が、裁縫グループのメンバーと「自由の娘たち」の組織の親密な関係を指し示しているからで

ある。

恐らく、イギリス製品不買運動に賛同する女性のグループと裁縫サークルのメンバーは相互に重なり合い、「自由の娘たち」の組織を構成していたのではないかと考えられる。例えば、プロヴィデンスやニューポートで結成された「自由の娘たち」には、グリーン、ホプキンス、アーノルド、ボーエン、タルボットなど、ロードアイランドの名門の家系の名前が多く含まれており、新聞紙上などでしばしば「身なりのよいご婦人たち」と言及されているように、メンバー構成の中心は各植民地社会の上・中流階層の愛国派の妻や娘たちであったと推測される⁹⁹。対英抵抗運動が激しさを増すにつれて、これらの女性たちが愛国的で政治関心の強い夫や父親たちから大きな思想的影響を受けていたとしても不思議ではない。

さて、それでは「自由の娘たち」は革命期を通してどの程度政治意識を高揚させていたのか。アメリカ革命がはたして女性のジェンダー意識の形成に決定的な役割を果たしたと言えるのであろうか。革命期の政治社会文化の変容過程の中に、われわれはジェンダーの問題を位置づけて考える必要があろう。女性たちの役割と社会的地位が当時どのように議論されたのかを考察する際に、今一度植民地全土で展開されたイギリス製品不買運動を取り上げなければならない。前述したようにタウンゼンド諸法の施行を境に、アメリカ植民地でイギリス製品の不輸入・不買運動がいっそう高揚し、女性たちもイギリス製品不買運動へ献身的に貢献することが要請されるようになった。1767年11月16日の『ボストン・ポストボーイ』紙は、「婦人達に告げる」という見出しを掲げ「アメリカ製のリンネル以外なにも身に着けてはなりません」と直接女性たちへ呼びかけて、ロンドン製の高級な生地やリボンなどの華やかな装飾の着用をさせて、国内産業を奨励することの重要性を熱心に説いている。また、祖国を愛する証として、「ボヒー茶やグリーン・ハイソン茶、その他の課税品の消費を慎むよう」に訴えた¹⁰⁰。このようなアメリカ女性への直接的な呼びかけは、イギリス製品不買運動の広がりとは対英抵抗運動が政治的で道徳的な意味合いを強めるにつれて、ニューイングランドにとどまら

ず植民地各地の新聞紙上で頻繁に見られるようになった⁹⁹。それまで活字メディアは主に社会の上流紳士たちの知的独占物であったので、刊行物が女性の広い読者を想定して公的な問題について対話し始めたことの意義は少なかった。

さらに重要なことは、女性たちもこれらの訴えに呼応して、自らの愛国的な決意や意見を表すエッセイや詩歌を新聞に積極的に投稿するようになったことである。「ある老齡の熱烈な自由の娘」は1773年12月の『マサチューセッツ・スパイ』に投稿して、「哀れなボストンを見よ、立ち上がりましょう、どのようなお茶も上陸させてはなりません。一度お茶がここに根を下ろし始めると、最も愛すべき自由と決別することになりましょう」と感情的な表現で政治的なメッセージを送った¹⁰⁰。また、翌年1月『ヴァージニア・ガゼット』紙に掲載された「ティー・テーブルへのある婦人の決別」と題された記事は、ティー・カップ、皿、クリーム容器、砂糖火鉢、お茶箱などの豪華なセットと一体になった茶会用テーブルに公然と別れを告げた。そして、彼女は「それを使用し続ければ、祖国が隷属的な鎖につながれてしまうだろう」と教えられており、そのことを彼女自身も真実として受け止めていますと語っている¹⁰¹。これらの事例からも分かるように、かつて婦人たちからめったに投稿されなかった、あるいはそうすることがタブーとみなされていた新聞などの活字メディアに、女性の意見として個別の記事が掲載され、婦人たちが自らの信条を表明するようになったことは、革命期に起きた極めて重要な社会文化における変化の一つであった。周知のようにイギリス製品不買運動は、イギリスからの輸入品の象徴として茶に対する大陸大のボイコット運動へと急速に拡大し、ボストン茶会事件を引き起こすまでに激化した。そのとき対英抵抗運動の成否を握ることになる、イギリス茶のボイコットは、日々の家庭や社交の場で中心的な家事役割を担っていた婦人たちの理解と協力なくしては遂行できなかったのである。この意味でイギリス製品不買運動は、婦人たちを初めて政治的な抗議運動へと積極的に駆り立てる契機になった。現実にはイギリス製品不買運動は本国政府から期待したほどの政治的譲歩をもた

らさなかったが、アメリカ植民地の婦人たちにとって公的な議論の場に初めて堂々と参加できる機会を与えたのである。このことは、恐らくアメリカ植民地の愛国派指導者たちにとって予期せぬ事態を招くことになった。すなわち、愛国的な運動への積極的な貢献を促す婦人たちへの呼びかけが、活字メディアという公共の空間で、初めて女性の政治参加と諸権利をめぐる議論を思いがけず誘発する結果になった。当時愛国派の紳士たちの多くは、その時あたかもパンドラの箱を開けてしまったかのような思いを抱いたにちがいない。

IV 革命期の公共圏の形成とジェンダー

ユルゲン・ハーバーマスの「公共圏」という概念は、近年近代史の研究で注目を集めている。ハーバーマスの議論の斬新さは、伝統的に政治権力によって規定される公的領域と私的領域という区分を超えて、新たな公的な議論の場としての空間が18世紀の西洋世界で初めて出現したとし、それを「ブルジョワ的公共圏」と呼んだことである。公共圏が成立するためには、新聞、雑誌などの印刷物の広範囲な流布とその消費者としての読者の存在が前提条件として不可欠であり、それらの新しい活字媒体に支えられた公的議論の場の形成はひいては近代の中産階級社会の台頭を促したとされる⁹⁰。最近初期アメリカ史の分野でもこのハーバーマスの解釈枠組から示唆されて、7年戦争終結後から18世紀末かけての間、アメリカ植民地全土に新聞やアルマナックなどのおびただしい数の活字出版物が出回るようになり、革命の到来とともにより広い読者層を取り込んで公的な議論を共有する空間が形成されたとみる解釈が打ち出されている⁹¹。

前節で考察したように、イギリス製品不買運動の展開の中で、婦人たちは革命運動に取り込まれていったが、この時女性の活動がかつてなかったほどに新聞紙上で注目され、また婦人たちへ直接呼びかける記事も顕著になった。ボストンのある新聞では、「婦人たちへ」というタイトルで、タウンの女性たちに植民地が置かれている厳しい政治状況を説明した後で、「もしあなた

方がこの偉大なアメリカ植民地の人々の救済になんとか貢献することができれば、すべての世代の人々が必ずやあなた方を祝福するでしょう」と女性たちの協力の必要性を熱心に説いた⁹⁰。これらの訴えに呼応して、女性たちも自ら進んで新聞や雑誌に投稿し始めた。折しも、アメリカ植民地の各地では新聞や雑誌が相次いで刊行され、イギリス議会の政策や貿易関係を伝えるだけでなく、それらの活字媒体では様々な意見の交換が繰り広げられていた。ニューイングランド、ニューヨーク、フィラデルフィア、ヴァージニアの主要な新聞の着目すべき記事や論説は、相互に繰り返し転載されて、植民地全土に及ぶ新たな「公共圏」を創出した。対英抵抗運動から革命への展開を促し、植民地の指導者たちに大陸大の共通の公的議論の場を可能にしたのが、まさに18世紀半ば以降の活字媒体の急速な広がりや広範な読者層を支えるアメリカ植民地における比較的高い識字率であった⁹¹。だが同時に、婦人たちのイギリス製品不買運動に対する顕著な活動と新聞・雑誌への女性たちの意見の投稿は、しだいに伝統的なジェンダー役割をめぐって革命運動の指導者たちと婦人たちの間の議論を引き起こすことになった。

対英抵抗運動の高揚期には、アメリカ植民地全体の世論形成に中心的な役割を果たした各地の新聞や雑誌の至る所で、ジェンダー間の意見交換や鋭い対立が見られるようになった。前節ですで見たとように、タウンゼンド諸法の導入の後、茶をはじめとするイギリスからの嗜好品のボイコット運動が高まり、婦人たちにも家庭やパーティでイギリス茶を飲用しないように新聞紙上で繰り返し要請された。例えば、このような訴えに対して、『ボストン・イヴニングポスト』紙の「婦人たち」は、紳士たちや夫の多くが日常生活を害するほど酒を飲み、酒場に頻繁に出入りするのをやめて、「よりやさしく、愛すべき恋人や夫」となるのなら、女性たちは喜んで「公共善のために好物の貴重なお茶を断ちましょう」と答えた⁹²。これは、茶のボイコットへの協力和引き換えに、男性たちの節酒と慈愛に基づく男女関係の改善を求める女性側からの新聞紙上での要求に他ならなかった。

また1767年末には、女性たちの愛国的な活動を伝える、紳士たちによるし

ばしば独善的な新聞記事に対して、三名の婦人が理路整然と抗議する記事も投稿された。先ず「SQUIBO」と名乗る人物が『マサチューセッツ・ガゼット』紙に寄稿し、ボストンの愛国的な婦人たちが会合を開いたことを話題にした。その際、彼は婦人たちが国内産業の育成のため紡績に専念し、ニューイングランドのラム酒以外は飲まないと誓ったことを伝え、それを聞いたある紳士が「お茶は禁止、ニューイングランド産ラム酒なら好きなだけどうぞ」という標語を煙突に記したことを冗談交じりで報じた⁹⁹。また、「若きアメリカ人」は『ボストン・ガゼット』紙で、植民地の危機に及んでアメリカ人の公共精神の回復と「質素、儉約、勤勉」の奨励を読者に熱烈に訴えながら、女性たちに対しても積極的な援助を求めた。「あなた方が公共善への貢献から除外されていると考えてはなりません。祖国はあなた方がより優しい女性的特質のすべてを捧げてくれることを必要としているのです」と述べて、アメリカ女性に贅沢な外国製品を避けて国内産の衣服のみを着用することを訴えた¹⁰⁰。さらに同紙で、ヘンリー・フリントという人物も「北アメリカの婦人たちへ」と題する記事の中で、歴史に貢献してきたヒロインたちの功績を称え、「何十万という男性兵士、この広大な大陸のすべての武装兵以上に、婦人たちが祖国に貢献できる力を持っていると信じています」と齒の浮くような賛辞を送り、植民地の婦人たちに当面の間華美な装飾品や衣服をすべて控えるように要求した¹⁰¹。

これらのような男性寄稿者からの独りよがりの呼びかけに、婦人たちは「Aspatia, Belinda, Corinna」の三名の署名で『ボストン・ガゼット』紙に投稿し、痛烈に紳士たちの記事内容に異議を唱えた¹⁰²。先ず彼女らの非難の対象は、まじめな婦人の愛国的な集会を揶揄する「SQUIBO」の論調に向けられ、「(婦人が) 外国茶を飲むかわりに酒を持ち込み、ティー・テーブルにはジョッキが置かれている」とでも本気で思っているのでしょうかと問いただして、彼の誤った報道が非難された。次に、婦人たちは「若きアメリカ人」の女性に対する皮相的な先入観を槍玉にあげた。「優美な女性的特質」を持つ婦人たちは、とかく「衣装、スキャンダル、中傷」などの話題に没頭

する傾向を持っているとする彼の見解は、大学を出たての経験不足の若者の意見として一蹴された。さらに、批判の矛先はヘンリー・フリントの記事にも向けられた。「現在の洋服の着用を控えて、アメリカ製のものを全面的に使用せよ」という彼の女性への呼びかけに対して、婦人たちはこうした要求がどれほど現実的なものなのかと疑問視し、すべて新しいアメリカ製の洋服を購入する金銭的な余裕など自分たちにはないことを伝えた。その上で、現在の古着をできる限り節約して使用し、それが廃れたときに、たとえ粗くても外国製品よりも愛着のあるアメリカ製の衣服と取り替えるほうがより慎重で現実的ではないかと指摘した。

こうした反論の後、三名の寄稿者の議論は自らの性役割に向けられた。婦人たちのイギリス製品不買運動への支持表明は、「アメリカにおけるイギリス人としての自由の砦であるこの偉大で素敵な町の自由市民にふさわしいものだと思っています」と述べて女性の寄稿者は胸を張った。また、公衆には事実を正確に知らせるべきであり、女性のグループの決議はたいへん重要なものなので、ボストン、プロヴィデンス、ニューポート、チャールストンをはじめ、他の多くのタウンでも注目を集めていることを強調した。そして、「公共の美德の聖地ではどのような些細な楽しみも喜んで犠牲にしようとする女性たちが大勢存在する」ことを指摘した。最後に、「私たち女性を劣っている者」として取り扱う紳士たちの風潮に警告をならし、「率直さ、正直さ、誠実さ、勤勉、また美德、自由、祖国への献身において婦人たちは決して劣るものではありません」と記事を結んでいる。

このようなやり取りから窺えることは、アメリカ植民地の上・中流の婦人たちは、対英抵抗運動の状況と意義を主体的にかつ正確に理解していたという事実であり、決して夫や愛国派指導者たちからの消極的な情報の受容者ではなかったということである。婦人たちはアメリカ植民地と本国の政治関係におけるイギリス製品不買運動の意味と目的を十分に認識していたし、誇るべき「自由市民」として紳士たちと対等に対英抵抗運動に参加している自覚が着実に彼女らの中に育まれていたのである。

次の事例として、1773年末から74年にかけて『マサチューセッツ・スパイ』紙で展開された飲茶の習慣を廃止する理由をめぐる論争を考察してみよう。それは、革命期に女性が公的領域に参入することで引き起こされるジェンダー間の摩擦の興味深い一例を我々に提示してくれる。

著名な愛国派のトマス・ヤング医師は、婦人たちに飲茶の習慣をやめることを促す際に、茶のボイコットの当時の政治的重要性にはまったく触れず、お茶は医学上好ましくなく健康を著しく害する結果を招くので飲茶の習慣を絶つべきである、と新聞紙上で警告した⁴⁹。これに反応して、『マサチューセッツ・スパイ』紙に寄稿した「ある女性」は、婦人への紳士と対等な情報の交換を求めて次のように主張した。

「仮にお茶が有害な葉であり、飲茶は有害だということが本当に以前から知られていたのならば、政治的な害悪として考えられる以前に、なぜこれらの議論がお茶の飲用に反対するために使われなかったのでしょうか。……もし飲茶の習慣を止めるあらゆる政治的理由に通じている紳士たちが、わたしたち婦人にいかに飲茶がこの国で政治的害悪であるかを理解するように、事実の十分かつ率直な説明を公刊し、紳士たちの知っているすべてのことを私たちに教えてくださるならば、飲茶の健康への有害を強調し、その害に関しての脅かすような話をする以上に、私たちに飲茶を断たせるより確実な方法となりましょう。」⁴⁹

ヤング医師はこの投稿記事を受けて、すぐさま反論して「あなたは自由の擁護者が今日の政治目的に使うために、飲茶についての数多くの恐ろしい話をでっち上げるまで、茶の不健康な特性を知らされていなかったと装っているのです」として、自分が率直に医学上の観点から飲茶の習慣を断つことを勧めていることを強調した⁴⁹。ヤング医師の弁明に対する「ある女性」の反応は、すばやくかつこの議論の本質を突いていた。「現在の場合、飲茶が個人的に有害なだけではなく、公共の害悪としてみなされているので、飲茶に

反対する議論は、公的な性格のものであるべきだということです」と彼女は鋭く応酬し、婦人たちが飲茶を止める理由を単なる健康上の理由ではなく、イギリス茶が「様々な公共の不満や圧制を私たちに導入する手段」であることを十分認識していることを主張した。さらに続けて、「お茶は非常においしいばかりか最も健全な飲物でありましたが、(飲茶の習慣を続けて)祖国を隷属化することに貢献するよりも私たちはそれをきっぱり断つべきです」と彼女は言い切った⁴⁹。

これらの男女間の言説に見られる緊張と対立は、アメリカ革命の嵐の中で婦人たちが自らの伝統的な性役割に直面し、対英抵抗運動に献身的に身を投じることで初めて政治的に目覚め、従来のジェンダー的空間区分を乗り越えようと格闘していた事実を如実に映し出している。18世紀の君主政文化の支配的影響の下で、政治権力と密接に結びついて極度に階層的でもっぱら男性の領域として限定されていた公共の概念が、未曾有の量の活字媒体に支えられた新しい近代的な公共圏の出現とアメリカ革命の到来によって大きく動揺しつつあった。まさにそれは、これまで封じ込まれていた女性たちの声が拡大したより包摂的な公共空間の中によく解き放たれてゆく瞬間であった。

V 終 わ り に

本稿では、対英抵抗運動が革命へと急進化する中で、アメリカ植民地の女性たちがいかに当時の緊迫しつつある政治状況を受け止め、またどのようにして伝統的なジェンダー観の矛盾を認識し始めたのか、という疑問を念頭において歴史的文脈の中でジェンダー関係とその変化を映し出す言説を分析してきた。ジョージ王朝時代にアメリカ植民地社会の成熟と符合して驚くほどの勢いで増加した新聞、パンフレット、雑誌などの活字媒体の台頭は、大陸大の公共圏の出現を促進させたが、植民地の上・中流階層の白人女性たちは、その新しい近代的な公共圏の中で初めて公的議論に参加する機会を見出したのであった。そして婦人たちの多くは、迫り来る革命の騒乱の最中、自ら進んで抵抗運動に身を投じることで、男性によって長い間伝統的に規定されて

きた女性の領分の曖昧さと不合理さに初めて自覚的に直面することになったのである。

有名なボストン茶会事件を引き金に強制的諸法が導入される1774年初めまでに、植民地の白人婦人たちの多くが政治意識に目覚め、紳士たちによって従来押し付けられてきた性役割の制限と新たに高揚した公共精神の間で心の葛藤を繰り返した。マサチューセッツのケンブリッジに居を構えるハナ・ウインスロップ夫人は、後に『アメリカ革命史』を世に問うことになるマーシィ・ウォレン女史に宛てた手紙の中で、「私たちは岬に投げ捨てられたお茶の正当な説明を期待しています。植民地の連帯、つまり植民地人の断固とした真剣な決心は、私たちによいことがもたらされる前兆でしょう。その決意がイギリス本国に知らされるなら、アメリカの娘たちでさえ政治家であり愛国派なのです。そして女性のあらゆる努力でこの善行を援助するつもりです」と述べて、事態が今後本国からの独立へ向けてさらに進展するならば、伝統的な性役割を越えて愛国派の一員として公共善のために奉仕したいという心情を吐露している⁴⁰。

実際独立戦争が勃発する直前の数年間は、アメリカ植民地で初めてジェンダー役割や男女間の「適切な領域」を巡って、活発な論争が活字メディアを通して交わされた時期であった。18世紀の啓蒙思想の影響を受けて、幾人かの知識人から社会における女性の教育の重要性が話題として上り始めたのもこの頃であった。しかし、女性のための大学設立の計画が報じられたとき、これに真っ向から反対する論者も少なからずいた。『ロイヤル・アメリカンマガジン』誌の「Leander」は、「女性が学者ぶった態度をとれば、やさしい女性に本来備わっている優美さが失われることになり、彼女たちを社交の娯楽にふさわしくないものにします」と断言し、婦人たちの「抽象的な考え」や政治形態などの知的な会話を耳にする洗練された紳士たちは、きつとうんざりするにちがいないと述べた。さらに続けて、「Leander」は女性にふさわしい学問として、「文学の上品な分野」を挙げ、読書や会話によって女性たちは趣味の向上に努めるべきだと主張した⁴¹。18世紀半ばまでに、大英帝

国の急速な商業社会と都市文化の発達に伴い、社交を盛り上げる華やかな「装飾」や「潤滑油」としての婦人たちの役割が大きく期待されるようになるが、「Leander」のこの主張は、女性には性的に固有の優美な性質が備えられているので、女性の学問もその特質に合致するべきだという当時の多くの紳士たちの支配的な観念を代弁するものであった。

しかし、この提言も翌月の同誌紙上で、「シルヴィア」と名乗る婦人からすぐさま反論された。彼女は女性たちが高等教育から締め出され、「ニュートン、ロック、クラーク、パークレイ、あるいはヒュームなどの著述家や論争的な神学に関する重大な著作」とならん関係がないと考えられていることこそ問題なのだと指摘した。また彼女は、「単に幾人かの紳士たちが男性は特別な学問を享受する排他的な権利を持っていると信じているからといって、私たちが何故それらの学問から完全に除外されなければならないのでしょうか」と問い、紳士たちはそのことに対して満足な理由を挙げることができないはずだとして、男性たちと共通の教育を受ける権利を女性にも要求した⁸⁹。このような事例は、アメリカ革命の到来が植民地女性のジェンダー意識の萌芽に密接に関わっていたことを明確に示唆している。「独立宣言」が出され革命戦争が本格化する時期までに、アメリカの白人女性たちは、公的領域での活動や女性としてのふさわしい社会的役割について省察し、自らの性役割を再規定することを余儀なくされたのである。

独立戦争の勃発後、アメリカ女性の革命への支持はより具体的な形をとり始めた。デボラ・ガーネットのようにロバート・シャートレフと名前を偽って大陸軍に従軍した女性も少なからず存在した。彼女は戦後女性愛国兵士として著名になるとともに、マサチューセッツ州と連邦議会に退役軍人恩給を請願し、後年恩給を認められている⁹⁰。正確な統計は得られないものの、戦争に参加した10万人から23万2千人のアメリカ人兵士の内、約2万人にも上る勇敢な女性たちが様々な任務について従軍していたと推定され、この数字は愛国派兵全体の8.6%から20%を占める⁹¹。その他の婦人たちも、戦火が広がるにつれて、コミュニティの自衛に積極的に加わったと言われている。

さらに、婦人たちの革命を後方支援する同盟も各地でいっそう活発化し、大陸軍兵士のためにシャツ、靴下、毛布などの生活必需品を各グループで裁縫し大陸軍に無償で提供しようとする運動が広まった。また、従軍兵士たちの給与の不足を補うために、各家庭をくまなく回って募金活動に奔走する婦人たちの活動も目立つようになった。とりわけ、フィラデルフィアの女性グループの組織的な支援活動は、戦時中の婦人たちの愛国主義の高まりをよく伝えている。ジョゼフ・リード夫人、ベンジャミン・フランクリンの娘にあたるリチャード・バーチ夫人、ベンジャミン・ラッシュ夫人らが中心となってフィラデルフィアとその周辺の婦人たちを組織し、1780年に大陸紙幣で約30万ドルの寄付金を集め、それを元に2,200枚のシャツを縫製して大陸軍兵士に寄付した⁸⁵。高名な愛国派医師ベンジャミン・ラッシュは、ジョン・アダムズへ宛てた書簡の中で、アメリカ社会や家族において女性たちの意見と影響力が重大なものになっていることに触れ、「私の愛しい妻は、あなたもご存知のように独立戦争の初めには戦争や夫の運命などについて女性特有の臆病さを持っておりましたが、今日大陸軍に寄付を募る婦人たちの一員になりました」と伝え、いまや夫人が愛国的な活動にたいへん熱心にかかわっているので、「彼女は私の生ぬるい態度を非難さえます」とその変貌ぶりに目を見張っている⁸⁶。このような婦人たちの愛国的な組織化は、ニュージャージー、メリーランド、サウス・カロライナなど至る所で展開された。『ペンシルヴァニア・ポケット』紙の編集者は、メリーランドの愛国婦人たちの活動を讃えて、「世界中の女性たちはアメリカ女性に義理があります。そう申しますのは、婦人たちが最高の政治的美徳を持ちうることを示したからです」と誇らしげに記した⁸⁷。

革命戦争終結までにアメリカの白人女性たちは、従来のコミュニティにおける宗教的な奉仕からしだいに活動の範囲を広げ、より世俗的で公的な活動領域に参入していった。1780年にフィラデルフィアで出版された、『アメリカ女性の感情』と題する大判印刷物は、女性たちの政治意識とジェンダー意識の明らかな高揚を如実に示している。その刊行物の中で、北部から南部

にかけて13州全土で婦人たちが純粋な愛国心に駆り立てられており、「輝かしい革命の成功を祈るだけの凡庸な期待を抱く以上のことを認められない現状を大変残念に思っています」と執筆者は不満を吐露し、「たとえ私たちの憲法上の欠点や世論と慣習のために、私たち婦人が男性と同じ道をたどって栄光へと邁進することができないとしても、私たちは公共善への献身において男性たちと少なくとも同等か、時には彼らを凌いでいるのです」と訴えた。また、「私の性（女性）の素晴らしい賞賛すべき偉業を誇りに思っています」と述べて、著者はアメリカ人女性の公的領域での活躍と貢献の決意を強調した⁶⁹。

148年の有名なセネカ・フォールズの「女性の意見宣言」の中で、独立宣言書のスタイルを借りて男女の平等な権利宣言と参政権の要求が示されたことは、確かにアメリカ女性史において一つの記念碑的な出来事であった。しかし、これまで考察してきたように、アメリカの婦人たちの政治意識とジェンダー意識の急激な芽生えは、対英抵抗運動と独立戦争期の政治的緊張と共和主義的言説の相互作用の中から生れ落ちた、いわばアメリカ革命の副産物であったと言える。おびただしい数の印刷媒体に支えられた新たな大陸大の公共圏の出現と同時に、革命期にはこれまで無名だった多数の「新しい男たち」が社会の指導者層や論壇に参入してゆくが、教養のある白人女性たちも初めて公共圏における自分たちの地位を模索し始めたのであった。

しかしながら、近代的な公共圏は旧いジェンダー的偏見から完全に解放された空間ではなかったことは周知の事実である。建国初期には、伝統的ジェンダー的役割をめぐる新聞・雑誌誌上で激しい論争が展開された。だが、19世紀初頭のアメリカ社会における急速な商業化と産業化の進展に伴い、労働の再定義が行われる中で、工場や家庭外の職場で働く男たちと家庭内にとどまり家事と子育てにもっぱら従事する婦人たちの空間的、社会・労働的役割区分がしだいに明確化されていった⁷⁰。このようなジェンダー役割の区別化に思想的根拠を与えたのが、スコットランド啓蒙と共和主義の伝統であった⁷¹。すなわち、スコットランド倫理哲学は社交における婦人の重要な役割

を強調することで、女性の家庭外での活躍の場を承認するものであったが、それは女性の特性に根ざした社会的役割に限られたものだった⁸⁹。これに対して共和主義思想は、共和国市民の公共精神を育み維持するための重要な社会的、家庭的任務を婦人に託すことで、女性たちに「美德の共和国」への貢献を促したが、女性史家リンド・カーバーが指摘したように「共和国の母」の概念は、当時の歴史的文脈に照らしてみればラディカルな意義を持つ一方で、男女の特性による役割分担や既婚女性の財産権の放棄など、たぶんに保守的な伝統を継承した概念だった。

本論の冒頭で紹介したアビゲイル・アダムズから夫ジョンへの有名な私信は、著名な愛国派指導者の妻であり、教養ある一アメリカ婦人の政治意識とジェンダー意識の高揚を如実に示す史料である。ところが従来歴史家は、この事例はむしろ例外的なものであり、当時の共和主義の隆盛の中で、ジェンダー的な対立や緊張関係はほとんど真面目な議論の対象にされなかったと考えてきた。事実ジョン・アダムズは、妻の要求に対して「あなたの驚くべき法案については、私は一笑に付さざるを得ません」と述べてまともに取り合わず、既存の男性中心的な法体系の中でも男女の平等な法の実施は可能なのだとアビゲイルを宥めた⁹⁰。だが、このような妻との応答の陰で学究肌のジョンは、自由と平等を信奉してアメリカ革命から誕生した新共和国において、賢明で財産を所有する婦人たちさえも政治から締め出してきた伝統的な慣行を平然と無視することができなかった。1776年5月、マサチューセッツ代議員のジェイムズ・サリバンに宛てた書簡の中で、アダムズは「多数派が少数派の意思に反して、彼らを統治する権利はどのようにして生じたのでしょうか。男性たちが婦人たちの同意もなく彼女らを支配する権利は一体どこに由来するのでしょうか。……だが、何故（われわれは参政権から）女性たちを排除するのでしょうか」と問いかけて、新しい民主主義的な社会秩序の浸透とともにいっそう顕著になるかもしれない婦人の地位と権利に関する矛盾点に対して不安を隠しきれなかった⁹¹。

アダムズの動揺は、共和国の誕生を境に急速に進展するアメリカのより平

等主義的で福音主義的な社会秩序の中で、しだいに先鋭化してゆくジェンダー関係の緊張と男女間の権利闘争の始まりを予兆するものだった⁹¹。19世紀初めには、産業化と「市場革命」の急激な波が新たな中産階級と都市民衆文化の台頭を刺激する一方で、教育の機会に恵まれた、より多くの中産層の白人女性たちの活躍が顕著になり始めた。彼女たちは禁酒や奴隷解放運動などの様々な社会改革運動に身を投じてゆく過程で、自ら性の政治的、社会的立場を省察し、やがて全国的に連帯してジェンダー関係の再構築を模索するようになるのである。その際、革命から建国期にかけて創造された「共和国の母」の概念は、確かにたぶんに保守的な伝統を内在するものであったが、これを乗り越えるためのラディカルで強力な武器を提供したのもまた革命の理念と女性たちの革命体験であった。その点で19世紀前半のジェンダー闘争は、まさにアメリカ革命の遺産の上に展開されたと言えるよう。

注

- (1) Abigail Adams to John Adams, March 31, 1776, in Lyman H. Butterfield, Marc Friedlander, and Mary-Jo Kline, eds., *The Book of Abigail and John: Selected Letters of the Adams Family, 1762-1784* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1975), 120-21.
- (2) 研究史上の整理として、次の論文が参考になる。Mary Beth Norton, "The Myth of the Golden Age," in Carol Ruth Berkin and Mary Beth Norton, eds., *Women of America: A History* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1979), 37-47; Norton, "The Evolution of White Women's Experience in Early America," *American Historical Review*, vol. 89, no. 3 (June 1984): 593-619; and Kathleen M. Brown, "Brave New Worlds: Women's and Gender History," *William and Mary Quarterly*, 3rd series, vol. 50, no. 2 (April 1993): 311-328.
- (3) Joan Hoff Wilson, "The Illusion of Change: Women and the American Revolution," in Alfred F. Young, ed., *The American Revolution: Explorations in the History of American Radicalism* (DeKalb: Northern Illinois University Press, 1976), 383-445.
- (4) Elaine F. Crane, "Dependence in the Era of Independence: The Role of Women in a Republican Society," in Jack P. Greene, ed., *The American Revolution: Its Character and Limits* (New York and London: New York University

- Press, 1987), 253-275.
- (5) Mary Beth Norton, *Liberty's Daughters: The Revolutionary Experience of American Women, 1750-1800* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1980).
 - (6) Linda K. Kerber, *Women of the Republic: Intellect and Ideology in Revolutionary America* (New York and London: W. W. Norton & Company, 1980).
 - (7) 例えば、対英抵抗運動に焦点を当てた、これまで最も包括的な次の二冊の研究書でも、婦人たちの活動に関する分析はほとんどなされていない。See, Edmund S. and Helen M. Morgan, *The Stamp Act Crisis: Prologue to Revolution* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1953); Pauline Maier, *From Resistance to Revolution: Colonial radicals and the development of American opposition to Britain, 1765-1776* (New York: Alfred A. Knopf, 1972).
 - (8) Edmund S. and Helen M. Morgan, *ibid.*; Bernard Bailyn, *The Ideological Origins of the American Revolution* (Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1967).
 - (9) John W. Tyler, *Smugglers and Patriots: Boston Merchants and the Advent of the American Revolution* (Boston: Northeastern U.P., 1991), esp. chaps. 3 and 4 を参照。
 - (10) Edwin J. Perkins, *The Economy of Colonial America* (New York: Columbia University Press., 1988), 34-35; T. H. Breen, "Narrative of Commercial Life: Consumption, Ideology, and Community on the Eve of the American Revolution," *William and Mary Quarterly*, 3rd series, vol. 50, no. 3 (July 1993), 484.
 - (11) T. H. Breen, "'Baubles of Britain': The American and Consumer Revolutions of the Eighteenth Century," *Past and Present*, no. 119 (May 1988): 73-104.
 - (12) Richard L. Bushman, *The Refinement of America: Persons, Houses, Cities* (New York: Alfred A. Knopf, 1992), 15-29, 182-186.
 - (13) Richard L. Bushman, "American High-Style and Vernacular Cultures," in Jack P. Greene and J. R. Pole, eds., *Colonial British America: Essays in the New History of the Early Modern Era* (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1984), 345-383.
 - (14) Bernard Bailyn, *The Ideological Origins of the American Revolution*, esp. chap. 6.
 - (15) Jacob M. Price, "The Rise of Glasgow in the Chesapeake Tobacco Trade, 1707-1775," *William and Mary Quarterly*, 3rd series, 11, no. 2 (April 1954), 196-197; Price, *Capital and Credit in British Overseas Trade: The View from the Chesapeake, 1700-1776* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1980);

- and T. H. Breen, *Tobacco Culture: The Mentality of the Great Tidewater Planters on the Eve of Revolution* (Princeton: Princeton University Press, 1985), 120.
- (16) Breen, *ibid.*, 128.
- (17) Breen, *ibid.*, esp. chaps. 4-5.
- (18) Glenn Curtis Smith, "An Era of Non-Importation Associations, 1768-73," *William and Mary Quarterly*, 2nd series, 20 (1940): 84-98; Charles M. Andrews, "The Boston Merchants and the Non-Importation Movement," *Publications of the Colonial Society of Massachusetts: Transactions 1916-17* (Boston, 1918), XIX: 159-259.
- (19) "Ladies of the Association," *Virginia Gazette*, July 27, 1769.
- (20) Joan R. Gundersen, *To Be Useful to the World: Women in Revolutionary America, 1740-1790* (New York: Twayne Publishers, 1996), 150.
- (21) Inez Parker Cumming, "The Edenton Ladies' Tea-Party," *The Georgia Review*, vol. 8, no. 4 (winter 1954): 389-395.
- (22) Alfred F. Young, "The Women of Boston: 'Persons of Consequence' in the Making of the American Revolution, 1765-76," in Harriet B. Applewhite and Darline G. Levy, eds., *Women and Politics in the Age of the Democratic Revolution* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1990), 198-200.
- (23) イギリス駐留兵の粗暴な行動やレイブはしばしば地元紙で報じられた。See, for example, *Boston Evening-Post*, February 27 and July 3, 1769. また、次の史料も参考になる。Oliver M. Dickerson, ed., *Boston under Military Rule, 1768-69 as Revealed in a Journal of the Times* (Boston: Chapman and Grimes, 1936).
- (24) Laurel Thatcher Ulrich, "'Daughters of Liberty': Religious Women in Revolutionary New England," in Ronald Hoffman and Peter J. Albert, eds., *Women in the Age of the American Revolution* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1989), 211-243.
- (25) Ulrich, *ibid.*, 216-217.
- (26) *Boston Evening-Post*, September 11, 1769; October 30, 1769.
- (27) *Boston Evening-Post*, September 11, 1769.
- (28) Lyman H. Butterfield, "General Washington's Sewing Circle," *American Heritage* 2 (summer 1951), 7-11, 68; Mary Beth Norton, *Liberty's Daughters*, 177-188.
- (29) *Address by Mrs. Richard J. Barker Before the Gaspee Chapter of the Daughters of the American Revolution* (Philadelphia: the Historical Register Publishing Co., 1894).
- (30) "Address to the Ladies," *Boston Post-Boy*, November 16, 1767.

- ③① 対英抵抗運動が単にイギリス製品のボイコットという商業的報復というだけでなく、葬儀や衣服の簡素化、ギャンブルの取り締まりなど急速にアメリカ社会の道徳改革的意味合いを強めて、男女を問わずより多くの民衆を巻き込んで革命期のナショナル・アイデンティティ形成の重要な役割を果たした点について、次の研究書を参考されたい。Ann Fairfax Withington, *Toward A More Perfect Union: Virtue and the Formation of American Republics* (New York and Oxford: Oxford University Press, 1991), esp. chaps. 1 and 5.
- ③② *Massachusetts Spy*, December 2, 1773.
- ③③ *Virginia Gazette*, January 20, 1774.
- ③④ Jürgen Habermas, *The Structural Transformation of the Public Sphere* (trans. Thomas Burger, with Frederick Lawrence) (Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1989).
- ③⑤ See, for example, Michael Warner, *The Letters of the Republic: Publication and the Public Sphere in Eighteenth-Century America* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1990), esp. chap. 2; Rosalind Remer, *Printers and Men of Capital: Philadelphia Book Publishers in the New Republic* (Philadelphia, 1996); and David S. Shields, *Civil Tongues and Polite Letters in British America* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1997).
- ③⑥ “To the Ladies,” *Boston Evening-Post*, February 5, 1770.
- ③⑦ Kenneth Lockridge, *Literacy in Colonial New England* (New York: W. W. Norton, 1974); David Hall, “The Uses of Literacy in New England, 1600–1850,” in William Joyce, et al., eds., *Printing and Society in Early America* (Worcester: American Antiquarian Society, 1983), 1–47.
- ③⑧ *Boston Evening-Post*, December 28, 1767.
- ③⑨ Reprinted in *Providence Gazette*, January 2, 1768.
- ④① *Boston Gazette*, December 21, 1767.
- ④② “To the Ladies of North America,” *Boston Gazette*, November 2, 1767.
- ④③ *Boston Gazette*, December 28, 1767.
- ④④ *Boston Evening-Post*, October 25, 1773.
- ④⑤ *Massachusetts Spy*, December 23, 1773.
- ④⑥ *Massachusetts Spy*, December 30, 1773.
- ④⑦ *Massachusetts Spy*, January 6, 1774.
- ④⑧ Hannah Winthrop to Mercy Warren, January 1, 1774, Mercy Warren Papers in Massachusetts Historical Society.
- ④⑨ “On the Education of the Fair Sex,” *Royal American Magazine* (April 1774), 131–132.
- ④⑩ *Royal American Magazine* (May 1774), 178–179.

- 50 Elizabeth Evans, *Weathering the Storm: Women of the American Revolution* (New York: Charles Scribner's Sons, 1975), 303-316.
- 51 Gundersen, *To Be Useful to the World*, 164.
- 52 Esther Reed to George Washington, July 4, 1780 and July 31, 1780, in William Reed, ed., *Life and Correspondence of Joseph Reed* (Philadelphia: Lindsay and Blakiston, 1847), II: 261-262, 264.
- 53 Benjamin Rush to John Adams, July 13, 1780, in L. H. Butterfield, ed., *Letters of Benjamin Rush* (Princeton: Princeton University Press, 1951), I: 253-254.
- 54 Quoted in Norton, *Liberty's Daughters*, 184.
- 55 "The Sentiments of an American Woman," reprinted in *Pennsylvania Magazine of History and Biography* 18, no. 3 (1894), 361-364.
- 56 Nancy F. Cott, *The Bonds of Womanhood: "Woman's Sphere" in New England, 1780-1835* (New Haven and London: Yale University Press, 1977); Jeanne Boydston, *Home and Work: Housework, Wages, and the Ideology of Labor in the Early Republic* (New York and Oxford: Oxford University Press, 1990), esp. chaps. 1 and 2.
- 57 Rosemarie Zagarri, "Morals, Manners, and the Republican Mother," *American Quarterly* 44, no. 2 (June 1992): 192-215; Jan Lewis, "The Republican Wife: Virtue and Seduction in the Early Republic," *William and Mary Quarterly*, 3rd series, vol. 44, no. 4 (October 1987): 689-721.
- 58 Rosemarie Zagarri, "The Rights of Man and Woman in Post-Revolutionary America," *William and Mary Quarterly*, 3rd series, vol. 55, no. 2 (April 1998), 216-224.
- 59 John Adams to Abigail, April 14, 1776, in L. H. Butterfield, et al., eds., *The Book of Abigail and John*, 127.
- 60 John Adams to James Sullivan, May 26, 1776, in Robert J. Taylor, ed., *Papers of John Adams* (The Belknap Press of Harvard University Press, 1979), IV: 208.
- 61 Judith Apter Klinghoffer and Lois Elkis, "'The Petticoat Electors': Women's Suffrage in New Jersey, 1776-1807," *Journal of the Early Republic*, vol. 12 (Summer 1992): 159-193; Chandos Michael Brown, "Mary Wollstonecraft, or, the Female Illuminati: The Campaign Against Women and 'Modern Philosophy' in the Early Republic," *Journal of the Early Republic*, vol. 15 (Fall 1995): 389-424.